

# SHANTI



2026.6  
Vol.323  
シャンティ

巻末言

## 道



### カンボジアとシャンティと、私の歩んだ時間

～「共に生き、共に学ぶ」を胸に～

独立行政法人 国際協力機構 (JICA) 専門家  
シュルツ 八坂 由美  
シャンティ国際ボランティア会 理事

カンボジアに初めて渡航したのは、1994年8月でした。当時シャンティの広報職員だった私は、東南アジアの事業地の多くを回り活動やイベント、関係者取材、写真や動画を多く撮りました。バタンバンでの職業訓練校で実施されていた陶芸活動で、地雷被害で片足を失いながらも、松葉杖で体を支え、たたきの技法で土を成形していく男性の姿を撮影しました。その懸命な姿に強く心を動かされたのを覚えています。

シャンティを離れた後、2006～2013年までは、配偶者の仕事の関係でカンボジアに長期滞在することになり、シャンティのカンボジア事務所でボランティアをさせていただきました。中でもシャンティ25周年式典用のビデオ制作は、1994年に自分自身が制作したシャンティ広報用ビデオを再編集することになり、感慨深いものを感じました。式典でお会いした多くの懐かしい方々も印象に残っています。

2022年には、カンボジアのポーサット州にリャン・クバウ小学校を建設していただきました。数年前に亡くなった実父からの少しの遺産を、自分だけで私的に使うことが憚られ、思い切ってシャンティにお願いして、場所は問わず一番必要



支援した学校の開校式でのテープカット。筆者右



支援した学校の子どもたち

な地域の学校建設に使うことになりました。開校式のイベントへの参加は、何事にも変え難い貴重な体験となり、今後も継続して支援する思いを新たにさせられました。

そして、2025年、シャンティの理事職を拝命いたしました。この原稿を書いている2025年12月現在、カンボジアとタイを取り巻く情勢には不安定さも見られ、シャンティが長年関わってきた地域の歩みに、改めて思いを巡らせています。

『共に生き、共に学ぶ』。困難な状況にあっても、現地の人々の声に耳を傾け、学びや文化を通じて寄り添い続けてきたシャンティの姿勢は、これからも変わることのない大切な基盤だと感じています。私自身も、これまでの経験とご縁を生かしながら、その歩みを支える一員として責任を果たしていきたいと思っています。



特集  
学びの種を  
ま  
蒔き続けて  
〜カンボジア35年のあゆみ〜

<福音館書店>  
『ぐりとぐら』作:なかがわりえこ、絵:おおむらゆり  
『らさぎのみみはなぜながい』文:絵:川口民次  
『おしゃべりなたまごやき』作:寺村輝夫、画:長新太  
『なしごなだけこの』作:松野正子、絵:潮川康男  
『ぐるんはのようちえん』作:西内ミナミ、絵:堀内誠一  
<ベネギン社> 『ほくはあるいたまっすくまっすく』  
作:マーガレット・ワイス・ブラウス、絵:林明子、文:坪井郁美  
<好学社> 『スイミー』作:レオ・レオニ、訳:谷川俊太郎



シャンティが活動を支援するカンボジアの幼稚園にて(2023年撮影) ©川畑嘉文

SHANTI vol.323 CONTENTS

4	特集 学びの種を蒔き続けて ～カンボジア35年のあゆみ～	26	開催報告 緊迫するタイ・ミャンマー国境のいま ミャンマー(ビルマ)難民キャンプでの25年
12	世界の絵本を読んでみよう 『お正月のパーシ(Hpar Si)の音』 ミャンマー 2025年	28	つくり手さんのぬくもり ネパールの生産者団体 VILLAGERS HANDICRAFT
14	世界の麺 ラオスの麺「カオ・ブン・ジェオ・キン」	29	絵本に込められた想い 『「はい」「いいえ」ほうこく』
15	世界の現場からAIRMAIL ▶BRC ▶ネパール ▶アフガニスタン	30	ファインダーをのぞいて 2026.02 能登半島地震復興レポート
22	令和6年能登半島地震 活動報告	31	お知らせ
24	ミャンマー大地震 活動報告	32	道 カンボジアとシャンティと、私の歩んだ時間 独立行政法人 国際協力機構(JICA) 専門家 シュルツ ハ坂 由美

カンボジアでの内戦終結から約30年。目覚ましい経済発展の一方で、都市と農村の格差は今も広がっています。シャンティは1991年に事務所を開設して以来、教育文化支援を継続。カンボジア文化の礎である仏教の復興をはじめ、教育へのアクセスが乏しい農村部で、幼児・初等教育の基盤づくりを支えてきました。子どもたちが継続して学べる環境を整えるため、学校建設や学校図書館の設置、移動図書館、絵本・紙芝居の出版を展開。さらに幼児教育の質向上にも力を注ぎ、遊びを通して学ぶ幼稚園づくりを目指し教員研修や教材開発、教室環境の整備を進めています。

シャンティの35年の歩みと成果、人々の声を通して未来を拓く学びの力をお届けします。



今号の表紙  
シャンティが建設を支援したカンボジアの学校図書館にて(2023年撮影)  
©川畑嘉文

## カンボジア は こんな国

カンボジアはインドシナ半島の南部に位置し、国境をタイ、ラオス、ベトナムに囲まれた国です。国土は日本の2分の1ほどで、約1,700万人が暮らしています。主な宗教は仏教ですが、イスラム教やキリスト教などを信仰する人々もいます。気候は熱帯モンスーン気候のため蒸し暑く、乾季と雨季に分かれています。

カンボジアは1953年にフランスから独立しました。1970年に内戦が始まり、1975～1979年のポル・ポト政権下で大量虐殺が起こり、教育や文化を含む社会基盤が壊滅的な打撃を受けました。その後も紛争は続きましたが、1991年のパリ和平協定と1993年の国連監視下での選挙により、本格的な国家再建が始まりました。現在は復興を経て、持続的な発展を目指しています。

歴史 経済

1990年代以降、和平とともに市場経済への移行が進み、カンボジア経済は成長を続けてきました。2000年代半ば以降は縫製業や観光業、建設業を中心に高い経済成長を記録しています。近年、1人当たりGDPは2,000ドルを超えました。都市部では開発やインフラ整備が進む一方、農村部では現在も多くの人が農業に従事しており、都市部との間には経済的な格差が見られます。

政治 社会

カンボジアは1993年の総選挙と新憲法制定により、国王を元首とする立憲君主制の体制が確立されました。与党カンボジア人民党が長年にわたり政権を担い、同党を軸とする政治体制が続いています。2023年には首相交代を経て世代交代が進みました。ASEANの一員として地域協力を進めるとともに、中国をはじめ各国との関係を深めています。

カンボジアの人口は1,700万人を超え、3人に1人が15歳以下と若い世代が多い国です。貧困削減が進み、国連が定める後発開発途上国から2029年に卒業する見込みです。一方、国内の雇用機会は限られ、近隣国へ出稼ぎに出る人も多くいます。都市化やデジタル化も進んでいますが、教育や医療などの社会サービスへのアクセスには地域差があります。



### 特集記事の執筆

カンボジア事務所 コーディネーター  
協坂 翠

一般企業、青年海外協力隊、NGO職員、日本大使館外部委員などを経て2025年4月にシャンティに入職。2025年10月よりカンボジアに赴任し、バットンバン事務所のコーディネーターとして勤務している。



# 特集 学びの種を 蒔き続けて

カンボジア35年のあゆみ



内戦終結後の復興支援を目的に、シャンティがカンボジアで活動を始めてから35年。2000年代以降、外国投資の拡大による経済発展を背景に、国の姿は大きく変化してきました。その一方で、貧困や国境地域の緊張など、いまなお多くの課題が残されています。シャンティのこれまでの活動を振り返るとともに、活動地からの思いをお伝えします。



# 1992年～

## カンボジア難民キャンプからの帰還

1992～1993年、国連カンボジア暫定統治機構(UNTAC)の下でタイ国境の難民約36万人が帰還しました。当時最大級の帰還事業として国連主導で帰還と再定住支援が進む中、シャンティは難民キャンプで亡くなられた方々の遺骨帰還にも携わり、尊厳の回復と心の復興に寄与しました。



カンボジア 難民帰還第一陣 (1992年3月)

## 学校建設

建設した校舎・園舎  
**303**校

学校を子どもたちが安全安心な環境で学ぶことができる場にするため、州教育局や郡教育局と協力して建設地を選定し、新校舎を建設します。近年は主に、雨風や気温に影響を受けやすく、老朽化して損傷が見られる木造校舎の建て替えを進めています。ニーズや資金に合わせ、トイレと手洗い施設を建設することもあります。事業期間中は、敷地計画立案、校舎維持管理、衛生管理の研修を行うほか、盛土作業や植樹などのプロセスは住民参加型で行います。また、教員や地域住民らで構成される学校運営委員会と共に学校敷地計画を作成し、学校全体の環境整備にも寄与しています。



上:新校舎での授業の様子  
右:学校建設活動の写真

## 伝統文化活動

復刻した仏教書など  
**89,102冊/154**タイトル

1970年代の内戦により仏教寺院が破壊され、<sup>多く</sup>梵書により仏教の書物が失われました。戦後の復興と発展において、仏教寺院と僧侶は大きな役割を果たしてきましたが、寺院に併設される仏教学校、図書館の復興、僧侶をはじめとした人材の育成は遅れていました。そこで、国の自立発展を目指してカンボジア宗教省・仏教教育局、仏教研究所、寺院らと協力して、職員研修や図書館員研修を実施しました。また仏教の経典や書籍を復刻し、カンボジア全国の寺院、仏教学校、関係省庁、図書館などに配布しました。さらに仏教研究所の再建、僧侶と村の開発に関する研修の開催、植林活動なども行いました。



霊廟に到着したトリピタカをカンボジアの高僧に贈呈する日本贈呈団



# 学びの種を蒔き続けて ～カンボジア35年のあゆみ～

過激な共産主義を掲げるポル・ポト政権下で、数十万人が隣国のタイに難民として逃れました。シャンティは難民キャンプで教育文化支援を行いながら、内戦によって傷ついたカンボジアの復興を支援するためカンボジア国内でも活動を開始しました。



# 1991年

## カンボジア事業のはじまり

東西冷戦構造が崩壊し、国際社会の協力によってカンボジアに平和の希望が見えてきたころ、1991年3月に秦、名倉、手束の3人はカンボジアの教育文化復興という熱い思いといささかの不安を胸に、灼熱のプノンペン国際空港に降り立ちました。激動の20世紀の中でも特に悲惨な歴史を背負ったカンボジア。ポル・ポト時代を生き延び、戦火を逃れた人々の中に「地獄を見た」私たちの先達の思いと経験を引き継ぎ、新たな挑戦が始まりました。



プノンペン事務所前 (1992年)

文筆: 手束耕治



## カンボジア事務所の開設

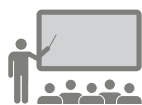
1991年3月にプノンペン事務所を開設しました。同時に、難民キャンプでの経験を活かし、職業訓練や教育文化復興支援に取り組みました。1992年に設立された印刷所は、当時のカンボジアにおける印刷活動の拠点となり、教科書や一般書籍、国連カンボジア暫定統治機構(UNTAC)の広報ポスターなどを印刷し、復興期の印刷基盤を支えました。



プノンペン職業訓練センター 印刷活動オフセット印刷室 (1995年)



## 2016年～



### 幼児教育

「遊びを通した学び」の研修 **63**回  
建設・修繕した園舎 **7**棟

幼稚園への就園率は低い水準にとどまり、幼い子どもの発達を促進するための適切な幼児教育・保育が不足しており、このことは初等教育にも悪影響を及ぼしています。そこで、幼児の心身の発達を育む「遊びや環境を通した学び」を取り入れた幼稚園活動を実践できるよう、教員研修、環境整備、保護者への幼児教育理解促進活動などを実施しています。教員向けのガイドブックを開発した他、おはなし、教材作成、遊びなどの効果的な教授法を学ぶ機会を提供し、幼児にとって魅力的な環境にするために、家具や遊具を含む園舎・園庭整備を行い、幼児教育の質及びアクセスの改善を目指しています。



教室前での園児と先生のごあいさつ



研修に参加した先生方

## カンボジアの教育と課題

カンボジアでは内戦後の復興を経て教育制度の再建が進み、教育状況は大きく改善されました。特に

初等教育の就学率は2000年代以降、着実に向上しており、基礎教育へのアクセスは全国的に広がっています。近年は教育の質の向上を重視し、2024～2028年の教育戦略計画では、教員の能力強化やデジタル教育の推進、21世紀スキルの育成などが重点施策とされています。また、教育行政の地方分権化と学校運営の強化も進められています。

一方で、都市部と農村部の教育格差は依然として課題であり、学習成果の向上や中等・高等教育への進学率の改善、退学防止が求められています。農村部の教員の確保や能力強化、学校施設や教材の整備、教育財政の安定的確保など、継続的な改善に向けた取り組みが必要です。

## 1993年～



### 出版活動

出版した絵本 **370,500**冊 **129**タイトル  
出版した紙芝居 **3,500**冊 **44**タイトル

ポル・ポト時代に多くの書物が破壊され、焼かれたカンボジアでは、1990年代初頭、クメール語で書かれた本は数も種類も限られ、とりわけ子ども向けの本はほとんどありませんでした。そこで、1993年から昔話や民話の中から子ども向けのお話を選び、カンボジア人が絵を描いたカラー印刷の絵本の出版を開始しました。翌年には国内初の紙芝居の出版にも取り組みました。これらは移動図書館で活用されるとともに事業地に配布されたほか、教育省や援助機関を通じて各地にも届けられました。2016年までに絵本129タイトル、紙芝居44タイトルを出版しました。



出版された絵本を読む児童



出版した紙芝居を使って読み聞かせ



### 読書推進

移動図書館利用者数 **532,424**冊  
図書館・図書室設置数 **669**館/室

子どもたちが絵本と出会う機会をつくるため、1993年からカンボジアで移動図書館活動を開始しました。農村部の小学校や幼稚園をはじめ、プノンベン近郊のスラム地域も巡回しました。移動図書館活動は現在まで継続し、利用者は延べ53万人を超えています。また、読書推進の担い手育成のため、1993年から教員や図書館員を対象に研修を行いました。その後、対象州は拡大し、州・郡教育局や教育省職員の人材育成へと発展しました。さらに、学校の読書環境整備の一環として、1994年から学校図書館・図書室の設置・整備を行い、これまでに669館・室を支援しました。



移動図書館活動は屋外でも



バンテイミンチェイ州での図書館研修会

学びの種を蒔き続けて—  
カンボジア35年のあゆみ

まとめ



PROFILE

カンボジア事務所 所長

菊池 礼乃

2011年シャンティ入職後、ミャンマー（ビルマ）国境支援事業  
事務所で7年間活動。帰国後、事業サポート課を経て現職

カンボジアは、長い紛争の歴史を乗り越え、再建と発展の歩みを続けています。その歩みの中で、シャンティは35年にわたり、教育と文化活動を通して人々に寄り添ってきました。地域住民や教育行政と連携しながら進めてきた学校や図書館の建設、出版や読書推進、幼児教育支援、伝統文化の継承などの取り組みは、子どもたちの学びの機会を広げるとともに、失われかけた知と文化を取り戻し、人々の誇りとアイデンティティを支える営みでもありました。教育と文化は未来への希望を紡ぐ力です。一冊の本、一つの教室、ひとりの教員との出会いは、世界を知る喜びをひらき、思考力や想像力、創造力を

育み、自立して歩む一人の人間として成長していく力を支えてきました。その積み重ねと対話の経験が、心の安寧や人と人との信頼を育み、やがて平和な社会の礎となっていくと信じています。2025年の国境地域での緊急人道支援は、難民支援から始まった原点を改めて思い起こす機会となりました。避難を余儀なくされた家族や子どもたちに移動図書館活動を行った際、子どもたちが食い入るように本を見つめ、声を出して読み始めた姿は、学びへの強い渴望を物語っていました。久しぶりに笑顔を取り戻す子どもたちの様子に、周囲の大人たちの緊張もほぐけ、

安堵が広がりました。どのような環境にあつても「学びを止めない」ことを支える重要性を、私たちは改めて実感しました。35年の歩みの中で出会った子どもたちは大人となり、親となり、次の世代へと学びをつないでいます。シャンティのカンボジア人職員も世代交代を重ねながら、その理念と共に学びの種を蒔き続けています。蒔いてきた種は地域に根を張り、確かに広がっています。これからも「共に生き、共に学ぶ」という理念を大切にしながら、教育と文化の力を通じて、尊厳と信頼に支えられた平和な社会づくりに向けて歩みを続けてまいります。



カンボジア・タイ国境紛争  
カンボジア避難民支援活動報告

[現場の様子と活動の内容]



避難者の声

私の名前はネック、34歳の主婦です。12月8日から避難生活を送り、2月になっても避難所でテント生活を続けています。自宅は国境からわずか500メートルで、いまだに帰還が許されていません。家を確認するためだけに短時間だけ戻れる許可が出ているのですが、家畜の鴨や鶏、犬までもが、世話をする者がいなかったので死んでいました。家での生活が本当に恋しいです。私たちは、家族皆で安全に帰還して普通の生活を取り戻せることを願っています。最後に、シャンティから受け取った緊急支援物資はとても役に立っています。ご支援に感謝します。

▶インタビューを実施した職員のプロフィール

カンボジア事務所 ティボー

社会に貢献したいと、他NGOを経て2023年シャンティ入職

2025年12月7日、同年7月のカンボジア・タイ国境での軍事衝突に続き、二国間の軍事衝突が発生、その後戦闘地域が拡大しました。12月25日時点で最大約64万人の避難民が発生し、さらに、国境の村の家屋、病院、学校、市場などが損壊する被害がありました。その後、12月27日に両国間で停戦が合意されましたが、国境の村ではタイ軍の実効支配が続いている村もあり、2026年2月中旬時点で約8万人の避難民が残っています。シャンティのカンボジア事務所では、衝突の翌日から情報収集や避難所への視察を行い、緊急人道支援に向けた準備を進めました。12月15日から約1カ月間は、カンボジア西部の3州で緊急初動調査・緊急支援活動を実施し、米などの食料キット、テント、蚊帳、就寝マットなどの生活必需品、石鹸、洗剤、生理用品などの衛生キットの配布を行いました。その後1月中旬から2月中旬までは、帰還できずにいた避難民を対象に移動図書館活動等の教育支援や衛生用品の配布を含む緊急支援活動を継続しました。



# お正月のパーシの音

Hpar Si

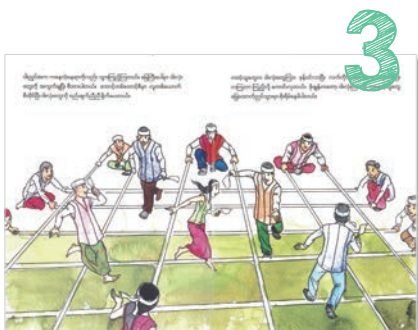
今日はカレンのお正月、ビャードーの月初めの日。フォー・チョンと兄のコ・コ・ギは新年のお祭りが開かれるサッカー場へと向かいました。  
カレンの旗がいたるところで掲げられています。「赤は勇氣、青は忠誠、白は純潔を表しているんだ。日の出は人生の進歩を、大きなパーシ（太鼓）は文化を象徴しているんだよ」と、コ・コ・ギが説明しました。



「パーシというのはカレンの人々にとってとても重要な楽器なんだ」とコ・コ・ギが言います。新年祭と収穫祭では「ドウドウ」と鳴るパーシの音に合わせて踊ります。ドンヤイン (Done Yan) ダンスの会場に行くと、小さなハンカチを持った踊り子たちが息を合わせて跳んだり踊ったりしているのが見えました。「なんてすてきなだろう」



次に二人は、ウォーニャット (War Hyat) ダンスを見に行きました。格子状の竹がリズミカルにたたかれる中、踊り子たちはその間を軽やかに飛び回り、ハンカチを振って舞います。フォー・チョンは踊り子たちの足が竹の間に挟まらないか不安になりました。  
そのあと二人は、バッファローを模した帽子をかぶって踊るバッファロードンヤインも見に行きました。



それから二人は、コーヒンパウン (Kauk Hyin Paung) もち米) がふるまわれる場所に。柔らかくてあたたかいもち米はゴマと塩 すりつぶしたココナッツがまぶされていて、とてもいい香りです。コ・コ・ギは、もち米の粘り気は連帯を表すのだと言いました。  
その後、チョーテイン (Chaw Taing) 竹棒のぼり(コンテスト)に行きました。潤滑油に覆われた竹の棒を上り、てっぺんにある旗を取る速さをグループで競います。



その次に、二人は展示場へ行きました。そこではカレンの伝統衣装、パアン市ツウエカピン山の写真を見ることができました。観光地や農場などの写真に加えて、地元の生産品の茶葉やコーヒー、カレン州の森で採れるハチミツなども展示されていました。

家に戻る道中、コ・コ・ギはカレンの人々はエーヤワディー三角州のあたりにも住んでいるのだと説明しました。農業のほかにもカレンの人々は漁業や練り魚、干物などの小さな商売を営んでいると聞き、フォー・チョンはいつかそこに行ってみたいと言いました。  
その夜、眠りについたフォー・チョンは、夢の中でドンヤインダンスを踊っていました。とても楽しい一日でした。



世界の現場から

# AIRMAIL

To 日本の皆さん From 活動の現場

このページでは、アジアの各国で活動するシャンティの様子や職員を紹介します。



## From BRC

ミャンマー(ビルマ) 難民事業事務所

子どもたちの半数以上が難民キャンプで生まれ育ち、外の世界を知らずに成長しています。閉鎖された環境で未来に夢や希望を持ってない子どもたちにとって心の栄養は何よりも必要です。この願いをもとに活動を続けています。

## From Nepal

ネパール

図書館・リソースセンター事業は、職業・IT・識字・農業など生活に直結する学びを提供し、生計向上を支援してきました。図書館は情報や支援にアクセスできる地域拠点として機能し、住民の自立と結束を促しています。



## From Afghanistan

アフガニスタン

近隣国から強制帰還させられたアフガン難民は水も仕事もない砂漠地帯で困難な生活を強いられ、子どもたちも不安定な環境に置かれています。シャンティは食料支援と移動図書館で心身の支えを届けています。



## 世界の麺

シャンティの活動地にはユニークな麺料理がたくさんあります。お年寄りから子どもたちまで年齢や世代を問わず愛される麺料理を、シャンティの職員がご紹介します。

## 自分好みの味で楽しむ、ラオス伝統麺

### ラオスの麺

[カオ・ブン・ジェオ・キン]

ເຂົ້າບຸ້ນແລະ ຈິ້ວຂີງ



ラオス事務所  
パニャンシリー・  
チャントーマ  
(通称ノイ)さん

ピエンチャン事務所で総務・財務部門のマネージャーとして働いています。

カオ・ブン・ジェオ・キンは、ラオスの伝統的な米麺です。最大の特徴は、自分好みの味に仕上げられること。ラオス語で生姜は「キン」と呼ばれ、この麺の名前に含まれている通り生姜が欠かせません。唐辛子と生姜をすりつぶした、スパイシーなソースが決め手です。麺は米粉と水を混ぜて一晩寝かせます。注文が入った後に麺をゆでるため、もちもちとした食感と新鮮さが楽しめます。次に野菜をゆで、魚を焼きます。すべての料理ができあがると、それぞれ別々のお皿でテーブルに運ばれます。テーブルに並んだ料理をすべて自分の麺とソースの合った器に加えても良いですし、焼き魚やゆで野菜など、好きなものだけを選んでトッピングしても良いです。最後にスパイシーなソースを加えます。これをどれくらい入れるかによって、辛さを自分で調整できます。



Mom Phan Kao Poun Jao King の店内

ほかにも店にはナンプラーやパデーク、砂糖、塩などが用意され、好みに合わせて酸味や塩味も調整できます。炭水化物控えめでたんぱく質が豊富な、栄養バランスの良い一品です。私がよく行くお店は「Mom Phan Kao Poun Jao King」アートルアン村の信号の近くにあり、1セット3人分で約1700円(255000キープ)です。

## Hot Topics



## PROFILE

ミャンマー（ビルマ）難民事業事務所  
アシスタント・コーディネーター  
チュララット・ケツアリカンワン  
（通称ムアイ）

シャンティ事務所でボランティアとして活動後、2025年7月より入職。現在は、3カ所の難民キャンプの担当として、図書館運営をサポートしています。

好きな言葉は「あなたの痛みは誰にも分からない。だからこそ、自分自身の最高の姿でありなさい」。

## 1 食料支援の停止

難民キャンプでは2019年まで現物配給が行われ、以降はフードカードで食料を購入していました。しかし2025年に支援終了が通知され、一般世帯は対象外に。多くの家庭が食事を切り詰め、近隣や寺院に食材を頼るほど深刻な状況に陥っています。2026年以降は最も脆弱な世帯に支援が限定されることになりました。

## 2 難民キャンプ外での就労開始

2025年10月、タイ政府は難民キャンプに暮らす難民がキャンプ外で合法的に働くことを認めました。各地でジョブフェアが開かれ、すでに1,000人以上が就労のためにキャンプを離れています。しかし条件や制限は多く、誰もが参加できるわけではありません。働き始めた人々の声もさまざまで、新しい環境になじめず戻りたい人がいる一方、前向きな経験を語る人もいます。

## 3 難民キャンプ内の教育状況

教育機会が限られる難民キャンプでは、大学教育がなく、多くの若者が家族を支えるため進学を断念しています。一方で学び続けたい人も多いものの、奨学金取得は難関です。現在はタイ語教育が進められ、進学や就労に必要な力の向上が図られていますが、依然として課題は多く、図書館での教育メディア提供や蔵書拡充などの取り組みが検討されています。

夜となりました。  
夜のステージでは、各民族の子どもたちが伝統舞踊や歌を披露し、それぞれの文化的アイデンティティと団結が表現されました。日本からのゲストによる伝統パフォーマンスもあり、文化交流が一層深まりました。  
今回が初めての参加でしたが、RCCFは単なる発表の場ではなく、子どもたちが自分を表現し、自信を育み、文化に誇りをもって分かち合える大切な空間だと実感しました。多様な背景を持つ子どもたちが希望や才能を秘め、人と人とを文化でつなぐ力を持っていることを改めて感じる機会となりました。

From BRC

## ミャンマー（ビルマ）難民事業事務所

BRC事務所ではコミュニティ図書館を通じた教育文化支援活動を行っています。今回は7年ぶりに開催した難民子ども文化祭の様子を紹介します。



## 7年ぶりに難民子ども文化祭を開催しました

難民子ども文化祭(RCCF)は、かつてシャンティが主催していた国際イベント「アジア子ども文化祭」の理念を受け継ぎ、2009年から2018年まで毎年難民キャンプで開催してきました。

2025年11月6日、難民キャンプでの活動25周年に合わせて、メラ難民キャンプで7年ぶりにRCCFが開催されました。フェスティバルの目的は、伝統文化の継承、子どもたちが自己表現できる場の提供、そして難民キャンプ内の多民族間の相互理解を深めることです。今年のテーマは「多民族共生と平和」で、困難な状況の中でも協力し合い、平和なコミュニティを築いていきたいという願いが込められています。

当日は500名以上が参加し、カレン、ビルマ、カチン、チンなど14民族のリーダーや子どもたちのほか、難民キャンプ委員会、図書館委員会、ユースボランティア、教育部会など多くの関係者が集まりました。今年は日本から20名のゲストを迎えることができました。プログラムは日中のレクリエーションと夜のステージの二部構成でした。日中は民族混合チームで活動し、異なる背景を持つ子どもたちが交流し、互いに学び合う貴重な機会となりました。

Hot Topics

1 ITスキル研修

ITスキル研修では、文書作成ソフトやメール、インターネットの使い方など、参加者のレベルに合わせた基礎的なコンピューター技術を学びます。地域にはこうしたスキルを習得できる場がほかになく、本研修は非常に貴重な機会となっています。さらに、参加者はスキル習得に加え、SNS上の誤情報への対処についても学び、ネットリテラシーの向上にもつながっています。



1

2 農業スキル研修

地域の農家を主な対象とした農業スキル研修では、農業や畜産の身近な課題に対する実践的な解決策を、専門家から助言を得ながら学びます。農家は生産性向上や家畜の健康改善などの知識を身に付け、生計向上に役立っています。必要な情報へのアクセスが難しい農村地域において、こうした取り組みは欠かせない役割を果たしています。



2



PROFILE

ネパール事務所 READ Nepal (シャンティのパートナー団体)のプロジェクト・コーディネーター  
タラ・バハドゥール・タバ

2004年にボランティアとしてREAD Nepalの活動に参加。地域の人々の変容に触れたことをきっかけに活動を継続。2018年からはプログラム・オフィサーを務め、現在はプロジェクト・コーディネーターとして、事業管理や自治体など関係者の連携に幅広い役割を担っている。人生のモットーは「人の可能性とコミュニティの力を信じる。思いやりと尊重、公平性と包摂性を大切に生きる」。



3

3 政変の影響 ネパールのZ世代デモ

2025年9月、汚職反対などを訴える若者を中心とした「Z世代デモ」をきっかけに当時の政権が退陣。その後まもなく、総選挙の実施を主な任務とする暫定政府が樹立されました。2026年3月に無事、総選挙が行われ、その結果が注目されています。(2026年3月現在)

From Nepal ネパール

ネパール事務所ではコミュニティ図書館を通じた教育支援活動を行っています。今回はシャンティと共に図書館事業を実施するパートナー団体READ Nepalのスタッフからお届けします。



図書館を通じた生計改善・貧困削減  
2023年から実施し、今年最終年を迎えるコミュニティ図書館・リソースセンター事業では、職業スキル、IT、識字、農業スキルを組み合わせ、生計改善と貧困削減を目的に、地域の人々の生活に直結する学びを広げました。そのひとつである職業・技術スキル研修では、野菜加工、金属加工、電気工など、地域のニーズに合った内容を提供しています。参加者は事業の立ち上げ・拡大や、地元での就業に必要な知識と能力を身に付け、就業や収入向上へとつながる変化が生まれています。

こうした活動を担う図書館・リソースセンターは、本を読む場にとどまらず、農業・教育・健康・生計向上などに関する情報や支援にアクセスできる地域の拠点です。住民自身が運営に関わることで住民同士の結束も強まり、主体的な地域づくりが育まれています。人々の人生に本当の変化をもたらし、若者が自信を取り戻す姿や、女性や周縁化されがちな人々が新たな可能性を見いだす姿に立ち会えることが、私の喜びであり原動力です。今後もコミュニティと伴走し、持続的な変化に貢献していきます。

コミュニティの「拠点」となる図書館へ

## Hot Topics

## 1 NGOへの脅威

アフガニスタンでは、2001年の復興以降、米軍をはじめとする多国籍軍が駐留し、反政府勢力との紛争が長期化していました。その中で、国際NGOも標的となり、誘拐や自爆テロ等の脅威が高まっていました。他方、多くの国民が飢えに苦しむ中で、NGOへの支援も理解されつつあり、地域住民の協力を得ながら事業を実施しています。

## 2 勸善懲悪省の復活

2021年のタリバン暫定政権復活後、「勸善懲悪省」が復活しています。これは、政権が掲げるイスラムの教えに基づいた規則に従わない人々を罰するもので、容赦ありません。特に女性に対しては厳格な制限が課せられ、NGOで働くことを禁止したり、働く際にも規則を順守しているか常に監視されています。女性が安全に働ける環境を事務所内に整えるのも重要な警備の仕事になります。

## 3 クリケット

アフガニスタンの特に東部地域では、クリケットの熱狂的なファンが多いです。テレビがない時には、ラジオでクリケットの試合を観戦するのですが、自分の応援しているチームが負けた際には、憤慨したり、クリケットの試合が理由でけんかをする人も増えたりします。クリケットは、唯一の娯楽でもあり、楽しいひと時を過ごせる時間になっています。



## From Afghanistan アフガニスタン

アフガニスタンでは、長年の紛争により治安不安が続いています。学ぶ機会を十分に得られない子どもたちに学びの場を提供するため、図書館活動に取り組んでいます。活動を円滑に進めるために安全を確保する職員の存在が不可欠です。

## PROFILE



アフガニスタン事務所チーフ警備員  
グル・モハンマド・ザビット  
2009年3月、祖国の復興に関わりたくいとシャンティの警備員に応募し23年、警備員のリーダーとして従事。  
国際機関の研修を受講し、シャンティの事務所の24時間警備地元警察との連携、治安状況の悪い活動地の移動の警備など、治安不安の中でもシャンティの事業が継続できるよう事務所や職員の安全に全力を注ぎました。

現地地活動を支える警備員としての役割  
私は、これまで事務所の警備員として勤務してきましたが、治安の悪い地域で活動をする際には、調査や配布に同行することも多々ありました。時に、職員よりも先に現地に赴き、現地の長老たちに安全面の確保について情報収集をしたり、協力要請を行ったりすることもありました。

境が改善したと回答してくれました。ド

者の96%が、この支援により当面の生活環境が改善したと回答してくれました。ド

また、2025年8月31日深夜、アフガニスタン東部を震源に発生したマグニチュード6.0の地震は、近年同国で起こった地震の中でも特に甚大な被害をもたらし、死者は2,200人超、負傷者3,600人超、被災家屋6,750軒以上、数千世帯が避難キャンプで過しています。そういった中でシャンティは、緊急人道支援として、クナル県ヌルガル郡で980世帯(6,860人)を対象に食料、生活の必需品キットを配布しました。この地域は道路状況が悪く、物資の輸送は困難で、当初の想定より時間や費用を要しましたが、支援を受け取った被災者の96%が、この支援により当面の生活環境が改善したと回答してくれました。ド

## アフガニスタン東部地震の甚大な被害とシャンティの支援

ここ数年、パキスタン政府の方針転換により長年パキスタンで難民生活をしてきたアフガン人が強制帰還されています。一日に1,000人以上の帰還民が国境を越えて移動していますが、彼らへの支援は限定的です。帰還民の子どもたちの多くは学校に行っておらず、言葉の問題も抱えているため、シャンティの図書館を利用する子どもが増えています。

アフガニスタン東部地震の甚大な被害とシャンティの支援

## パキスタンからのアフガン難民の強制帰還と子どもたちの状況



移動図書館活動風景

- 1 輪島市内に並ぶ仮設住宅
- 2 利用者さんと本を選ぶ輪島市図書館の権野さん
- 3 本を選ぶ利用者の皆さん。仮設住宅に併設されている公民館が改装中のため玄関で本箱を広げました
- 4 新しい移動図書館車両

# 令和6年能登半島地震—活動報告

震災から3年目を迎えた石川県輪島市では、公費解体がほぼ完了し、かつての町並みは至る所で空き地へと姿を変えました。市内に建設された約3,000戸の仮設住宅へ多くの方が拠点を移し、街中には寂寥とした雰囲気があります。深刻な被害を受けた集落の中には、今も100世帯以上が長期避難世帯として、自宅に戻る事が出来ない地域も存在します。

復興が進むにつれ、一人ひとりが歩む道のりは少しずつ異なってきました。災害公営住宅への入居、自宅の修繕、あるいは能登を離れる方。生活環境が多様に変化する中で、個々の困りごとや悩みが見えにくくなり、課題が埋もれてしまふ恐れもあります。

また、解体を待つ公共施設も多く、文化的施設・サービスの再建にはまだ時間がかかります。変わり続ける環境の中で、被災された方々が納得して次の一歩を選び、より良い暮らしを築けるように私たちは、日常に寄り添う活動を地域の方々と育て、共にありたいと思います。

## 移動図書館活動の報告

2024年7月より、輪島市図書館と協力して移動図書館活動を続けています。

2025年は13カ所の仮設住宅や公民館へ毎月巡回し、本の貸し出しとサロン活動を行いました。また、4月までは奥能登豪雨で被災された方の避難所への特別巡回も実施しました。年間の実施回数はいくつでしょうか。

被災して全部捨てたわ。仮設は狭くて本を置く場所がないから今は借りるのがいいね。

こうした声に応えるべく、私たちは「日常を感じる空間」として、たわいのない会話ができる居場所を大切にしています。一方で、会話の中でこぼれる悩みや苦慮に耳を傾け、必要に応じて悩みが少しでも解消されるように他機関との連携も重要な役割だと感じています。震災後の生活の変化に寄り添う中、さまざまな支援制度などの情報提供も必要とされています。

## 移動図書館車両贈呈式の報告

2025年12月16日、移動図書館車両を輪島市へ寄贈する贈呈式を行いました。贈呈式では、シャントイ会長の若林恭英より小川正輪島市教育委員会教育長(右下写真、左から3番目)へ目録を手渡しました。小川教育長からは、震災直後から続くシャントイの活動への謝辞とともに、移動図書館活動が「図書へのアクセス回復だけでなく、居場所や心の癒やし、さらには生活



移動図書館車両贈呈式

再建のヒントになる」と大きな期待を寄せていただきました。

車両の外装デザインは、金沢美術工芸大学の協力によるものです。輪島の豊かな空と海をモチーフに、一目で図書館だと分かるデザインと、市の鳥であるトキの朱色を重ねた配色で親しみやすく楽しい印象になりました。2026年3月以降、新車両で運行を行う予定です。

**PROFILE**  
シャントイ  
国内緊急人道  
支援担当  
中井 康博



大学卒業後、永平寺での修行を経てシャントイへ入職。これまで8カ所の被災地に関わり、令和6年能登半島地震では、震災直後より現地に常駐し、支援を続ける。

# ミャンマー大地震 活動報告



地震直後のマンダレーの状況

## 緊急期の活動報告（2025年3月末～5月末）

被災地域での食料、水、避難場所、医療など多様な支援が必要になったことから、マンダレーおよびネピドーにて現地でも活動している団体と協力し、計843世帯、2,934名に対して緊急食料や生活必需品を配布しました。地震直後、被災者は調理環境になかったため、調理不要のまま食べられる食品を中心に手配し提供しました。

一年で最も暑い時期でしたが、住民の多くは屋外や学校施設、テントでの避難生活を続けていました。水道管の破損による生活用水不足が全地域で深刻で、トイレ・浴場など衛生環境の悪化も顕著でした。子どもへの心理的影響は大きく、「二人で眠れない」「小さな物音でもおびえる」などトラウマ症状が多く見られました。この状況を受けて、シャンティはヤンゴンで購入した絵本を子どもたちに届けました。

## 教育施設への支援活動（2025年12月～2026年4月下旬）

今回の地震では初等・中等教育施設も深刻な被害を受けました。発生直後には2,600校以上が損壊または全壊したと報告され、2025年6月の新学期開始時点でも数千人の子どもが学習を再開できない状況が続いていました。マンダレー地域教育局によれば、同地域の全4,270校のうち約3割にあたる1,223校が損壊し、ネピドーでも758校中638校が被害を受けました。改修を必要とする校舎は両地域で計1,429棟にのぼること。多くの学校では過密状態での授業が続ぎ、不適切な学習環境が明らかとなりました。こうした状況を受け、子どもたちが安心して安全に学べる環境を確保するため、両地域で被災した学校校舎の再建に取り組みしました。



2025年3月28日、ミャンマー中部マンダレー近郊を震源とするマグニチュード7.7の大地震が発生しました。震源の深さは約10kmと浅く、国内を縦断するザガイン断層のずれによるものでした。発生から数分後に大きな余震が発生し、被害がさらに拡大しました。この地震で、死者5,352人以上、負傷者7,108人以上、行方不明者538人が報告されています。

地震の被害は、ミャンマー第2の都市マンダレーのほか、ザガイン、マグウェ、東シャン州、ネピドー、バゴーでは、住宅や宗教施設、道路、橋梁なども広範囲で破損し、通信・電力・水道といったライフラインは長時間にわたり停止しました。その結果、多くの避難者を生むことになりました。被災地域では食料、水、避難場所、医療など多様な支援が必要になりました。しかし、マンダレーおよびネピドー国際空港が損傷・閉鎖されたことで救援活動にも深刻な影響が出たほか、国内では内戦が続いていたことから情報収集や国際支援の受け入れが困難な状況となっていました。



協力団体による食料配布（マンダレーにて）



地震直後のネピドー・ピンマナ郡の状況



避難所で絵本を手渡す



被害を受けた学校校舎（マンダレーにて）



地震直後のネピドー・ピンマナ郡の状況

# 緊迫するタイ・ミャンマー国境のいま

## ミャンマー（ビルマ）難民キャンプでの25年

ミャンマー（ビルマ）難民キャンプでの活動開始から25年を迎えるにあたり、現状と課題を共有するオンラインイベントを2025年12月5日に開催しました。第1部は秦辰也副会長より、タイにおける難民受け入れの歴史や政策の変遷について解説。第2部はミャンマー（ビルマ）難民事業事務所のセイラー副所長と中継をつなぎ、食料支援縮小という深刻な危機に直面するキャンプの現状や、7年ぶりに開催された難民子ども文化祭の様子、そしてこれからの展望についてお伝えしました。（内容・肩書は2025年12月時点）

### 第1部 難民・移民受け入れの歴史と、大きな転換点

秦…タイは歴史的に移住者が形づくってきた国です。難民条約には加盟していませんが、長年にわたり、閣議決定に基づき周辺国からの避難民へ人道支援を行ってきました。しかし近年、ミャンマー難民への認定審査は厳格化しています。

そして今、大きな転換点を迎えています。国際的な資金不足により、キャンプへの食料・医療支援が縮小されました。これを受け、タイ政府は2025年10月、難民キャンプ設立以来初めて、一時的にキャンプ外での就労を許可する方針を打ち出しました。

これが「社会統合」への道となるのか、あるいは不安定な労働力としての「周辺化」とどまるのか、注視が必要です。タイには難民だけでなく、400万人近い移民労働者や、多くの無国籍者が暮らしています。どのような立場にあっても、人の痛みを我が痛みとして想像し、彼らが尊厳を持って生きられる社会を目指す必要があります。

### 開催報告



これは「社会統合」への道となるのか、あるいは不安定な労働力としての「周辺化」とどまるのか、注視が必要です。タイには難民だけでなく、400万人近い移民労働者や、多くの無国籍者が暮らしています。どのような立場にあっても、人の痛みを我が痛みとして想像し、彼らが尊厳を持って生きられる社会を目指す必要があります。

会は、彼らにとって唯一のものでした。

かつては「静かに本を読む場所」と思われていた図書館は、今では子どもたちが心を解き放ち、命と希望、そして癒やしを得る場所になっています。

私の願いは、ミャンマー本国に解決策が見え、難民キャンプの人々が自由と共に生きられる日が来ることです。難民キャンプで生まれ育ち、故郷を知らない子どもたちが、望む未来へ向かって学び続けられる機会が与えられることを願っています。小さな手が集まれば、大きな変化を生み出せると信じています。

### 中原所長からのメッセージ

中原…「こんな場所に本当に人が住んでいるのだろうか？」。2000年、初めて難民キャンプを訪れた時の第一印象でした。そして「生き残るために、自由を得るために国境を越えてきたのです」という人々の言葉は、当時の私の心に深く突き刺さりました。

難民キャンプでの図書館活動を通じて、「文化」という言葉をよく耳にしました。「祖国を逃れた私たちですが、自分たちの民族に誇りを

### 第2部 閉ざされた難民キャンプでの25年、そして未来へ

セイラー…私は入職前、ボランティアで難民キャンプの学校の教師をしていました。当時は図書館も、絵本も教材も何もありませんでした。子どもたちはトラウマを抱え、勉強に集中することが難しかったのです。ほとんどの子どもは、夜に勉強するためのロウソクを「本がほしい」と頼んでくる彼らにとって、将来を思い描くことは非常に困難でした。

そこから25年、シャンティは図書館活動を続けてきました。しかし今、難民キャンプは新たな危機に直面しています。食料支援を行っている団体から「食料支援が2025年末で終了する」という通知が出されました。約10万人が食べるものを失う危機が迫っています。医療サービスも縮小され、重症患者の搬送費が自己負担になるなど、生活は困窮を極めていきます。

こうした中、10月からキャンプ外での就労許可が出され、すでに100名以上が働きに出ましたが、慣れない環境や家族との別居など、新たな苦勞も生まれています。

### 出口の見えない閉塞感と、切実な願い

セイラー…最近話を聞いた23歳の男性は、ミャンマーで生まれ難民キャンプで育った若者です。彼は「高校までは勉強できたが、それ以外は何もありません。しかし長期化する暮らしの中でそれが失われてきていました。図書館が改めて文化の大切さを教えてくれました」と。

2021年以降、帰還の目的が途絶えてしまいましたが、図書館が尊厳や文化を守り、生きる力を与えてくれる場所であると信じて、これからも活動を続けてまいります。

### プロフィール



**秦辰也さん**  
シャンティ国際ボランティア会 副会長  
1984年から2008年までシャンティの専任スタッフとして活動。活動地での社会開発や人権などの問題にNGOの立場から関わる。タイ・バンコク事務所 所長、アジア地域事務所 所長、事務局長、専務理事などを経て、2023年4月より現職。



**ジラポーン・ラウィルン(セイラー)さん**  
ミャンマー(ビルマ)難民事業事務所 副所長  
2001年よりシャンティの図書館アシスタントコーディネーターとして入職。以来20年以上にわたり、図書館事業に携わる。人生のモットーは“Every cloud has a silver lining (止まない雨はない)”

イベントの様子はYouTubeでご覧いただけます

ご視聴はこちら



子どもたちの年齢や文化的背景に応じて必要な絵本は異なり、児童書の書店員、図書館員、出版社から、おすそめを教えてください。それぞれの絵本に込められた想いを紹介します。



## 絵本に込められた想い 絵本を届ける運動

**こどもが笑顔の世界は  
大人も笑顔の世界**

こどもたちが、きもちよく毎日を過ごすために、安心して大きくなるために、「はい」「いいえ」と「いいえ」＝「いやな」ものを報告していきます。

「はい」は、たとえば深呼吸のできるきれいな空気、「いいえ」は、たとえば叩いたりけとばしたりする暴力。それは本来あたりまえであつてほしいのに、現実はどうでしょう。環境破壊、暴力、いじめ、誹謗中傷、貧困、戦争…「生きる」という基盤を揺るがすことは一向に絶える気配がありません。

だれしも生のスタートはこどもです。こどもたちの声を聞いて、「生きる」基本にたちもどり、こどもも大人も一緒に、いつばいの「だいきずき」と「うれしい」に包まれる世界を描いてみませんか。

ずっとこどもの笑顔を願う作品をつくってきた浜田桂子さんが、どうしても伝えたい想いです。



出版社紹介：  
郷内厚子さん  
理論社

焦土と化した日本に豊かな種をまこうとの思いで、理論社は誕生しました。いつの時代にあつても、こどもたちには生きる喜びとなる一冊の本が必要と考えます。人びとの知と真理を豊かに伝えるべく、未来と世界をみつめながら本をつくり続けています。



### 『「はい」「いいえ」 ほうこく』

作：浜田桂子  
出版社：理論社



### 言語・テーマ

子どもたち自身が、平和な社会とはどのようなものかを考えるきっかけになればと思います。この絵本は、現在も紛争の影響が続くミャンマーやタイの難民キャンプに届けます。

参加のお申し込みはこちらから



クラフトエイドはアジア各国で民族独自の伝統や技術を生かした商品づくりに取り組んできました。このページでは民族の手仕事とスタッフおすそめの商品を紹介します。

つくり手さんのぬくもり

## CRAFT AID



生産者団体の女性たち 撮影：岡篤郎

〔つくり手さんの紹介〕

### ネパールの生産者団体 VILLAGERS HANDICRAFT

ネパールの西側の山奥にあるバジュラという集落を中心に活動する団体です。豊かな水資源に恵まれたこの集落では、草木を刈り、糸を紡ぎ、機を織ることが日々の暮らしの一部です。「ものをつくること」とは日々を営むこと。この団体は、何世代にもわたって受け継がれてきたこの営みを未来へとつなぐことをミッションとしています。この村で育つ子どもたちが、将来「ここで暮らしたい」と思えるように。そうした願いを込めながら、村で生まれる原材料を正當な価格で仕入れ、この村の経済を支えています。

ネパールでは、女性が家庭を守る存在として外で働くことを制限されることも珍しくない中、「働きたい」と願う女性たちが家庭と仕事を両立できる環境を整えることで、ネパール女性の社会的立場の向上にも取り組んでいます。



スタッフのおすそめ商品

### ゾウのしあわせマスコット

ネパールのフェルト生地で作られているゾウのマスコットです。ふんわりとした手ざわりでお守りのような存在。それぞれ異なる耳の柄や表情を楽しめます。ゾウさんの体となるフェルト部分はこの団体とパートナー関係にある障がい者施設の方々、鼻や耳、目などのパーツはこの団体で働く女性たちの手で一つひとつ丁寧に仕上げられています。



クラフトエイド・オンラインストアから商品をご購入いただけます。

## シャンティからのお知らせ

### 2025年度の翻訳絵本が活動地へ向け旅立ちました

2025年に「絵本を届ける運動」でつくっていただいた翻訳絵本が2月3日(火)に活動地へ向けて、シャンティの東京事務所を旅立ちました。運び出し当日は、翻訳絵本づくりに参加いただいた企業や団体の方、曹洞宗総合研修センターの方がボランティアでお手伝いに来てくださり、職員も含め46名で、2025年の翻訳絵本333箱を運び出しました。合計18,109冊の翻訳絵本がカンボジア、ラオス、ミャンマー、ミャンマー(ビルマ) 難民キャンプ、タイのミャンマー移民学校に届く予定です。

2026年は17,888冊を目標にお申し込みを受け付けています。みなさまのご参加をお待ちしています。



◀2026年のお申し込みはこちら



### 人事のお知らせ

#### ●入 職

Sahil Shapoor	経理課 海外経理担当(パートタイム職員)	2025年11月1日付
榎本 未希	事業サポート課 民間支援者および民間資金担当	2026年1月1日付
朴 梨沙	国内事業課 多文化キッズコーディネーター	2026年1月1日付

#### ●退 職

水上 麻記子	広報・リレーションズ課 絵本を届ける運動担当(パートタイム職員)	2025年8月31日付
湯浅 真澄	事業サポート課 民間支援者対応	2025年9月30日付
吉村 莉恵	広報・リレーションズ課 広報担当	2025年11月30日付
小野 久美子	海外緊急人道支援課 海外緊急人道支援担当	2026年2月15日付
伊藤 恭子	広報・リレーションズ課 広報・支援者サービス担当	2026年2月28日付

#### ●赴 任

脇坂 翠	カンボジア事務所 コーディネーター	2025年10月1日付
------	-------------------	-------------

#### ●休 職

加瀬 貴	海外緊急人道支援課 課長	2026年1月1日付
------	--------------	------------

シャンティ 2026年6月号(通巻323号) | 2026年6月1日発行

発行人：若林恭英  
 発行所：公益社団法人シャンティ国際ボランティア会  
 〒160-0015東京都新宿区大京町31 慈母会館2・3階  
 TEL 03-5360-1233 FAX 03-5360-1220  
 WEB：www.sva.or.jp E-Mail：info@sva.or.jp  
 編集人：鈴木晶子  
 編集・制作：株式会社文化工房  
 イラスト：きよはらえみこ  
 印刷：株式会社サンエー印刷

当会へのご寄付は、所得税、住民税、および法人税、相続税の優遇措置が受けられます。  
 ©Shanti Volunteer Association.  
 「シャンティ」は、FSC®森林認証紙にノンVOCインキ(石油系溶剤0%)で印刷しています。



川畑 嘉文(フォトジャーナリスト)

Yoshifumi KAWABATA

ニューヨークの雑誌社勤務時代に9.11を経験し、記者職を捨て写真の道に進むことを決意。2002年、会社を退職しタリバン政権崩壊後のアフガニスタンを訪れ取材を行った。2005年フリーランスのフォトジャーナリストとなり、世界中の難民キャンプや貧困地域、自然災害の被災地で取材を行い、雑誌や新聞などに写真と原稿を寄稿している。

# Shanti's PhotoLog

ファインダーを のぞいて



門前町の仮設公民館前から見渡す日本海。眼前の仮設住宅は取り壊され公営住宅が建設される予定。

### 2026.02 能登半島地震復興レポート

今年2月、輪島市取材する機会をいただきました。瓦礫は撤去され、水道や道路などのインフラも回復し通常生活に戻ったかのように見えますが、仮設住宅に暮らす方々の悩みは募るばかりです。公営住宅の完成に伴い仮設住宅が取り壊される(一部は改良を加え公営住宅として再利用)ため、行き先を決めなければならないからです。

民間の賃貸物件はほとんどの地域で空きがなく、公営住宅への移住が現実的なのですが、県の補償で暮らせるのは3年のみ。一定以上の世帯収入がある場合、年々加算されていく高い家賃を支払わなければなりません。新たに家を設けるのは、特に高齢者にとってあまりにも負担が大きく、最適な選択肢がない厳しい局面を迎えているのです。



- 2024年1月に撮影した輪島市黒島の重要伝統的建造物保存地区
- 2026年2月、輪島市黒島の重要伝統的建造物保存地区を定点撮影。崩壊した建物が残されていました
- 笑顔を見せた移動図書館のご利用者たち

